

基礎・基本の定着を目指した授業の改善・工夫 ～主体的・対話的で、深い学びを通して～

I 主題設定について

本部会では、昨年度から「基礎・基本の定着を目指した授業の改善・工夫」をテーマとし、本年度は、「主体的・対話的で、深い学びを通して」をサブテーマとした。

アクティブラーニング的な視点を大切にした授業づくりの改善工夫と、課題解決型学習を仕組む中で、各領域に於いての基礎・基本の定着を図り、課題解決を図る過程で必要となる思考力・判断力・表現力等を育み、高めることができるだろうと考え、本研究を深めてきた。

II 研究の内容

1 研究のねらい

- (1) 授業実践を通して、基礎・基本の定着を目指した授業の改善・工夫を考える。
- (2) アクティブラーニング的な視点を大切にした授業実践及び研究を行う。

2 研究の概要

- (1) 年間2回の授業研究を通して、研究のねらいに迫る。

[1 1月「ダンス」(現代的なリズムのダンス) 山梨南中学校 小沢 隆広 教諭]

[2月「球 技」(ハンドボール：ゴール型) 山梨北中学校 宮本 武彦 教諭]

- (2) 各校による基礎・基本の定着を目指した授業の改善工夫についての取り組み実践や学習カード等の情報交換、先進校の文献や資料等を参考にして研究を深める。

3 授業実践：1

- (1) 単元名 「ダンス」(現代的なリズムのダンス)(中学2年生男女選択)
- (2) 授業者 山梨南中学校 小沢 隆広 教諭
- (3) テーマ・サブテーマに関わって(「知識構成型ジグソー法」を取り入れた実践)

ア授業の流れ

- ・①一斉(集団ランニング)→②あいさつ、出欠確認、健康観察→③基礎体力トレーニング(ダンスストレッチ、ショートダッシュ)→④本時の学習の確認
- ・ねらい：曲のイメージやリズムをとらえ、小グループで考えたダンスを再考しながら、グループでダンスを創作しよう。
- ・小グループで考えてきたダンスをグループ内で確認し、構成を再考する。
- ・構成したダンスを確認しながら、グループで練習する。
- ・本時の振り返りと全体の構成や表現の工夫について課題を確認し、発表する。

イ「主体的・対話的で深い学び」に迫る手立て(ジグソー活動の活発化)

- ・ラジカセをグループに1台用意し、話し合いや練習を行う場を設定。
- ・i P a dの利用。(グループ分はないので、ローテーションで行う)

- ・各グループにホワイトボードとマグネットを用意し、動きの工夫や集団での動き、隊形移動などの構成や話し合いの場を設定。

ウ教材教具等の工夫

- ・スクリーンを使っての一斉基礎体力トレーニングを行う。(ダンスストレッチ)
- ・授業のめあて、内容をホワイトボードに提示し、生徒に授業の見通しを持たせる。
- ・エキスパート活動やジグソー活動、クロストーク活動に適した学習ノートや個人の学習カードを用意する。

授業実践：2

(1) 単元名 「球技」(ハンドボール【ゴール型】) 中学2年生

(2) 授業者 山梨北中学校 宮本 武彦 教諭

(3) テーマ・サブテーマに関わって (ICT機器の活用)

ア授業の流れ

- ・①あいさつ、出欠確認、健康観察→②ウォーミングアップ(ランニング・補強運動・遠投)→③本時の学習の確認
- ・ねらい：ゴール前の空いたスペースに走り込むには、どのようにすればよいのだろうか。
- ・考えてきた作戦をグループで確認し、4対4のゲームを行う。
- ・タブレットで撮った自グループの映像を見て、課題に応じた作戦を再度立てる。
- ・本時の振り返りと次のゲームに向けての課題を確認し、発表する。

イ「主体的・対話的で深い学び」に迫る手立て

- ・作戦ボードとマグネットを各グループに用意し、話し合いや練習の場面で利用。
- ・各グループにタブレットを用意し、グループの課題を明確化する一助とする。

ウ教材教具等の工夫

- ・自己・相互評価カード、個人上達チェック表の作成
- ・思考の過程がわかるようなグループノートの工夫

Ⅲ 成果と課題

授業研究については、主にダンスにおける【知識構成型ジグソー法】についての研究を進めてきた。新たな領域でのジグソー法の提案であり、研究会を通して多くの質疑・指導助言がなされ、充実した研究会となった。その中でも、ジグソー活動が活発に行えるためには、前段階のエキスパート活動が重要であり、その意味においても系統的な指導計画と基礎・基本の重要性を再確認できた。

また、生徒の学習過程を見取ることができる学習カードの工夫やグループボードの工夫、ICT機器の有効性とその活用の工夫、さらに、授業のめあてや学習内容を明示し、生徒にその時間の見通しを持たせることの重要性を再確認できた。

今後、ICT機器の導入に向けての環境整備が進む中で、その活用方法(いつ、どんな場面で、何をポイントに、等)の明確化と、さらに活用できそうな領域を広げていく努力が必要だと考える。同時に、あくまでICT機器は授業を深める上での一つの手段であることを認識し、授業者は「単元を通して何を学ばせたいのか」の授業観を持つことが重要である。今後も生徒数を含め学校環境は異なるが、各校の実態に応じた授業実践と情報交換を行い、共通認識を持つ中で、互いに学び合いながら研究を進めていきたい。

[部長 小沢 正志]